

日・中国交正常化30周年記念、国際山岳年記念

日・中チョー・オユー
女子友好合同登山隊2002

橋本 しをり



■初の日中女子合同登山

今回、本年の日中国交正常化30

日本山岳会は、1980年のチヨモランマ峰登山を皮切りに、1988年日本・中国・ネパール三国チヨモランマ合同登山、1990～1991年ナムチャバルワ、1995年マカルー東稜など、約20年にわたって中国における登山活動を継続し、同国登山界との交流を深めてきました。一方、日本山岳会による女性合同登山の歴史も古く、1968年の日本・インド合同カイルス峰(5656¹)をはじめとし、1976年、同じくインドのイースト・アビ・ガミン峰(7355¹)登頂が行われてきました。

周年ならびに国際山岳年を記念し、中国チベット登山協会からの働きかけを受けて、2002年秋、世界第6位の高峰チョー・オユー峰(8201¹)に、日中女子による当初の合同登山隊を派遣し、両国のさらなる友好と交流の発展をはかるための登山が計画されました。

登山隊の名称は日・中チョー・オユー女子友好合同登山隊2002(The Japanese Chinese Women's Mt. Cho Oyu Expedition 2002-CJWCE 2002)であり、チョー・オユー峰のノーマルルートからの登頂、日中登山界の友好と交流の発展、日中女子登山者の交流の促進、高所における女性の医学研究を主な目的として組織さ

2002 年 (平成 14 年)
11 月号 (No. 690)

社団法人 日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価 1 部 150 円

URL ● <http://www.jac.or.jp>e-mail ● jac-info@jac.or.jp

目 次

日・中チョー・オユー女子友好合同登山隊2002……………	1
いまだ高くそびえる世界最高峰への挑戦……………	4
Climbing & Medicine……………	15
海外の山……………	6
報告……………	7
図書委員会・「ラスキンとアルプス」/自然保護委員会後援・フォーラムIN小谷(2)/山の自然学研究会・上高地インタープリター/NPO山の自然学クラブ・誕生から1年	
さんけん通信……………	9
支部だより……………	10
岐阜/秋田	
東西南北……………	12
日本山岳会の未来について/シニアふたりでムスターグ・アタ/チョー・オユー女子登山隊祝賀会/グリンデルワルト村・安曇村姉妹都市30周年記念祝賀会	
図書紹介……………	14
会務報告……………	16
INFORMATION/新入会員/図書受入報告……………	18
ルーム日誌……………	19

▶ 日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
月・火・木…………… 10～20時
水・金…………… 13～20時
第2、第4土曜日…………… 閉室
第1、第3、第5土曜日…………… 10～18時

れました。これは、これまで20余年に渡って中国における登山活動を継続してきた日本山岳会においても、初めての日・中女子の合同登山隊となりました。

チョー・オユー峰自体は現在ではポピュラーな山であり、多くの日本人にも登られています。女性による2カ国の合同チームが8000峰登山を行なったケースは日本ではきわめて稀であり、参加する日本側隊員にとつては、これまで情報の乏しかった中国の女性登山者と接し、彼女らと友好を深めることで、大変貴重な体験が得られました。

■日・中のメンバー

日本隊は、大学時代に日本山岳会学生部で活動していた大学山岳部OGを中心に登山隊が組織されました。日本側隊長には、橋本しをり(東京女子医大山岳部、女子登攀クラブ、ザフロントランナーズクライミングクラブ)、登攀隊長を恩田真砂美(上智大学山岳会、クライミングファイト)がつとめ、隊員として井出里香(女子登攀クラブ)、柏澄子(獨協大学山岳会、

オールラウンド・クライマーズ・クラブ)、大窪三恵(明治大学炉辺会、春日井山岳会)、足立道代(東京農業大学山岳会)が参加しました。中国側は、チベット登山隊に属する職業登山家が選ばれました。

中国隊の総指揮は、チベット登山協会の張江援さんがとられ、中国側隊長は、桂桑(グイサン)、登攀隊長は吉吉(ジジ)、隊員として、普布卓(プブツォカ)、拉吉(ラージ)、倉拉(ツアンラ)が参加しました。今回の合同登山隊の総勢は、高所協力員である開村(リーダー)、拉巴、礼西次仁、加拉、丹增多吉、小斉米さんを含め、29名という大所帯でした。

当初、ラサ大学の学生(数理学科、建築学科の2名)も中国隊に参加する予定でありましたが、直前に北京大学の学生がシシヤンマで遭難する事故があったことから、ラサ大学の方針で急遽不参加となったのは残念でした。

中国隊のメンバーはチベット登山隊に属し、これまでも欧米および日本の登山隊と多くの登山を行ってきた高所登山の専門家です。

彼女たちはチベットに生まれ育ち、日々高所でのトレーニングをされており、たいへん屈強な方々でしたが、真珠をアクセサリーとして身につけられた方が多いのが印象的でした(ラサでは真珠がファッションとして流行しているとのことでした)。また、家庭をもたれお子さまのいる方もあり、登山隊としての任務と家庭との両立に取組んでいました。

■調印式から登頂まで

登山に先立つての調印式は北京の人民大会堂で行われ、日本からは、大塚博美会長、西村政晃常務理事が出席されました。

登山の行程は、8月6日に日本隊は日本を出国し、バンコクを経て、8月7日にカトマンズ入りし、8月8日から16日まで、ネパール国内にて高所順応活動を行いました。その後、8月20日にラサに移動し、中国隊と合流しました。中国隊のメンバーは普段からラサの体育局登山隊の住居に生まれ、トレーニングを一緒にされていて、チームワークはよく整えられていました。

8月25日にはともに、チョー・オユーベースキャンプ入りしました。中国隊との交渉に際し、日本人によくありがちな曖昧な表現ではなく、欧米人のようにはっきりと意志を伝えた方がよいということを感じました。

9月1日より登山開始し、高所順応しつつ、C1→C3のキャンプを設営し、この間、天候に恵まれない時期もありましたが、この時、支援隊の賛田さん、練木さん、坂本さんにベースキャンプまで差し入れを持って応援にきていただき、とても励みになりました。

そして、10月1、2日の2日にわたり、南西稜からの登頂を試み、成果をあげることができました。

登頂したのは、1日の第1次アタック隊の恩田真砂美登攀隊長、柏澄子隊員、大窪三恵隊員、中国隊の吉吉登攀隊長、拉吉隊員、普布卓隊員、2日の第2次アタック隊の足立道代隊員、中国隊の桂桑隊長、倉拉隊員でした。

■おわりに

また、今回はインターネットのホームページを利用してラサやカ

トマンズの市街の様子や、登山隊の活動の進捗状況を日本におられる方々に配信するとともに、日本からはインターネットの掲示板を利用して、登山隊にメッセージを送れるようにしました。登山隊の活動をなるべくリアルタイムの情報として提供しようと試みたので

すが、機器のトラブルなどもあり、情報の配信は遅れましたが、日本から多くのメッセージをいただきたいへん励みになりました。

ベースキャンプを撤収してラサに戻ってきたときに、ポタラ宮前の広場で歓迎式典が催されましたが、出席者の中に長尾梯夫副会長



ABCからチョー・オユー峰を望む

がいらっしゃるのに気づいた時は隊員一同とてもうれしく感じました。

今回の合同登山の成功にあたり、日本山岳会ならびに中国チベット登山協会、チベット自治区人民政府、中国チベット自治区体育局の関係各位、およびご寄附をいただいた会員の方々、協賛各社にこの場をお借りして感謝いたします。

【日程】

8月6日 日本隊

成田より出国、バンコクへ

8月7日 バンコク→カトマンズ

8月8日→16日 ネパール国内にて高所順応活動

8月20日 カトマンズ→ラサ 中国隊と合流

8月21→23日 ラサ滞在

8月23→25日 ラサ→シガツェ

ティンリ

8月25日 チョー・オユーBC入り

9月1日 登山開始

10月1日 第1次隊登頂

10月2日 第2次隊登頂

10月9日 BC撤収

10月10→11日 ティンリ→シガツェ

エラサ

10月11→15日 ラサ滞在

10月15→20日 カトマンズ滞在

10月20日 帰国

【各キャンプの標高】

BC 5000m

ABC 5700m

C1 6400m

C2 7200m

C3 7500m

頂上 8201m

登頂祝賀パーティー開催される

日中国交正常化30周年を記念して行われた世界第6位の高峰チョー・オユー（8201m）女子合同登山隊の登頂祝賀パーティーが11月11日、東京新宿の中村屋で開かれた。

会には、橋本隊長および4人の隊員、大塚会長ら日本山岳会会員、さらに後援した日本テレビ、東京読売新聞社などの関係者60人余りが出席した。

大塚会長は「女子の合同登山はインド隊以来久しぶりだが、8000mの高峰の合同登山成功は日本山岳会の100周年事業の登山につながる今後の大きなステップになる」と挨拶。

橋本しをり隊長は改めて、恩田真砂美登攀隊長、井出里香隊員、柏澄子隊員、足立道代隊員の4人を紹介（大塚隊員は現在ネパール滞在中）。日本側総隊長を務めた長尾副会長の乾杯で懇談に入ったが、隊員を中心にぎやかな歓談の輪ができ、楽しい祝賀会となった。

（今村千秋）

いまだ高くそびえる 世界最高峰への挑戦

東京大学スキー山岳部 山田 淳

8848^{メートル}。世界最高峰、エヴェレストの高度である。気圧は3分の1気圧、気温は零下30度を下回る。こんな過酷な条件の世界最高峰でも、次のような話がよく聞かれる。「昔ほど難しくはない」「酸素吸ってシエルパを連れてれば誰でも登れる」と。果たしてそうだろうか。

5月17日。僕はエヴェレスト北側の最終キャンプ(8300^{メートル})にいた。予報通り天気はいい。快晴。0時45分(ネパール時間)、アタックをはじめ。酸素ボンベを3本、他には水と少しの食糧、カメラなどを背負い、いよいよ世界最高峰への挑戦となったのだ。昨秋、僕は世界第6峰のチョー・オユー(8201^{メートル})に登っていた。初めての8000^{メートル}峰だったが、簡単に考えていた。世界に14ある8000^{メートル}峰のなかで、もつとも簡単だといわれる山。7000^{メートル}までに何も問題なかったで、エヴェレストに向けての順

応としての位置づけしか考えていなかったのだ。

しかし8000^{メートル}峰はそんなに甘くはなかった。何とか登ったものの、余裕など全くなかった。何とか登った、という感じだった。8000は甘くない、7000とは全く違う、ということを経験に銘じて帰国することになった。

それからエヴェレストに向けての真剣なトレーニングが始まった。週2回の高所訓練、その合間での筋トレ、有酸素トレーニング。必死の思いでトレーニングを繰り返した。このままではエヴェレストに登れない、切迫感があつた。

そして出発の日を迎え、順調に順応を繰り返して、登頂日を迎えた。すでに5人の登頂メンバーのうち、3人は順応がうまくいかず帰国してしまっていた。長く天気が悪かった今年の気候のなかで体調を維持するのはそんなに容易なことではない。

トレーニングの成果が出て、僕



独り占めのエヴェレスト山頂でパソコンを開く(山田のサイトより)

の体調はまさに絶好調。登れる。そう確信して最終キャンプを出発したのだ。最終キャンプでは、予定通り寝ることはなかった。寝れば呼吸数が落ち、酸素摂取量が減る。寝なくても横になっただけの休息で登ることができた。日本にいたときに勉強し、考えていた通りの行動だった。

順調にペースを上げ、3つのステップを越える。エヴェレスト北側にはファーストステップ、セカンドステップ、サードステップと呼ばれる3つの壁が立ち並んでいる。体力的にも精神的にも余

裕を持ってその3つのステップを越える。

サードステップを越えたあたりで日の出を迎えた。ほぼ世界最高所でのご来光。あと1時間前後で頂上に着くはずだ。右にはマカル、正面にはローツェ・シヤール、左には昨秋登ったチョー・オユー。すでにエヴェレスト以外では経験できない高さまで登っていた。

6時25分。僕は世界最高峰に立った。チョー・オユーのときと同じシエルパ、プルパとともに。ほかに誰もいない。混雑するエヴェレストの頂上というイメージがあるが、あとから聞いた話では、2番目に登頂した人より2時間以上早い登頂だったそうだ。山頂独り占め。晴れわたった視界。最高に幸せな気分のおかげで、頭の中は「早く下りなくては」ということではない。

余裕がなかったわけではない。むしろ、かなりの余裕を持てた。登頂だった。しかし、この背中に背負っている酸素ボンベがなくなるとき、それは死を意味する。10分ほど撮影などをした後、早々に下山。酸素ボンベが外せる7500^{メートル}近くまで下りなくては安全

圏とはいえない。ゴールは頂上ではないのだ。

こうして僕の世界最高峰への挑戦は成功した。いや、世界最高峰へ挑戦したわけではない。昨秋からのトレーニングのなかで自分の限界に挑戦していたのだ。帰国した今、はつきりと言える。8848mという高さはそんなに甘くない。酸素を吸ってもシエルパに助けられても、今までの経験と体力、総合力が試される場なのだ。今年も死者が出て、何十年連続という不名誉な連続死亡記録も更新されている。登山道でも死体を見た。決して山で死んだら本望、ではない。それでも人は簡単にエヴェレストに集まる。世界最高峰というだけで、登山者のひとつの夢となることはよくわかる。しかし、簡単に登れる山ではない。

登頂率がいまだに30%を超えない、その理由がわかっていない人たちが簡単に無酸素などと言っていた。無酸素など、簡単に口にすべきではない、と思った。世界最高峰、いまだに高くそびえ、人々の夢を打ち砕いている。

(東京大学山の会会報「TUSA Cニュース」より転載しました)

Climbing & Medicine · 15

パルスオキシメータ

野口 いづみ

血圧や心電図検査は一般の方にも馴染みが深い。最近登場したモニターのニューフェースといえる器械にパルスオキシメータがある。以前は重く、大きく、高額であった。現在では小型軽量化し、また安価になったために、容易に高所に持参できるようになった。高所トレッキングを行う一部の旅行社ですでに採用しており、ご存知の方も少なくないだろう。

パルスオキシメータは指先を洗濯ばさみのようなセンサーではさみ、連続的に動脈の酸素化の程度(動脈血酸素飽和度)と脈拍数を示す器械である。センサーには発光ダイオードが内蔵され、拍動している動脈血の成分だけを読み取ることができる。ヘモグロビンが酸素に結合している酸素ヘモグロビンは赤く結合していない還元ヘモグロビンは黒いことを利用し、指先を透過した光の赤度と黒度を分光分析し、2波長の光の吸光度の比から動脈血酸素飽和度が算出される。以前は採血しなくては動脈血の酸素のレベルを知ること

ができなかったことを考えると、すぐれものである。

動脈血酸素飽和度の最高値は100%であり、ヘモグロビンが最大限に酸素に結合している状態である。通常の生活圏(低地)の大気中では正常値は96%以上であり、それ以下では低酸素症と考えられる。高度が上昇すると大気中の酸素のレベル(酸素分圧)は低下し、標高5500mでは半分になる。それに伴って低酸素状態となり、動脈血酸素飽和度は低下する。高所では過呼吸をすると酸素飽和度を上昇させることができ、高所馴化が良い人では低下が少ない傾向がある。

高所馴化は、当初は換気量の増加と心拍出量の増加などの呼吸循環系の代償によって行われる。心臓については、高所馴化がスムーズな人では心臓の1回当たりの拍出量が多くなり、脈拍数の増加は少ない。したがって、「酸素飽和度÷脈拍」が高値であれば、つまり、酸素飽和度が高く、脈拍数の増加が少なければ、高所馴化が良好であるという目安になる。

しかし、パルスオキシメータは脈拍がとりにくいと測定できず、寒冷などで末梢循環が悪い場合には値を得にくい。また、呼吸の状態で値は容易に変動するので、安定した呼吸状態の時に測定する必要がある。さらに、爪にマニキュアをしていると低値を示す。マニキュアは高所トレッキングには避けるべきおしゃれといえよう。

海外の山

マルコの不明、
山野井夫妻の生還

江本 嘉伸

ステイブ・ブーン・コッチと聞いて、ああ、と思う人は、現代の山、それもパウダー系のクライミングと滑降の世界についてかなり知っている、と言っているだろう。

米国ワイオミングのジャクソンに住む33才の山岳スノーボーダー。1987年以来もっぱらアメリカを舞台に困難な登攀と滑降の世界に挑戦を続け、グラランド・ティートンのブラック・アイズ・クロワールの滑降はじめ40を越える難ルートのスノーボード初滑降を成功させている。いまでは舞台を世界に広げ、昨年2月、オセアニア最高峰のカルステンツ・ピラミッドからの滑降に成功、「七大陸最高峰への登頂と山頂からのスノーボーディング」に王手をかけた。残るはエヴェレストである。チョモランマからのスノーボード滑降と言えば、マルコ・シフレディがすでにやっている。以前このコラ



昨年5月、エヴェレストBCのマルコ
(ラッセル・ブライスのサイトより)

ムでも書いたが、昨年5月25日、石川直樹がラッセル・ブライス隊のメンバーとして登頂した際、同じ隊のメンバーとして誰よりも早く登頂し、頂上から6400mのABCまでスノーボード滑降をやつてのけた22才のフランス青年だ。最高峰からの滑降を果たした今、彼は何をめざすのだろうか……。

そんな問いかけは、全く無意味だった。信じられないことに、この秋、マルコはそのチョモランマ北壁で行方不明になっていたのである。でも、なぜ？

メールで届けられたラッセル・ブライスの沈痛な文章で事態をのみこめた。マルコは、昨年5月に自分が滑降したルートでは不完全とみなしたらしい。「ホーンバインと日本隊のふたつのクロワールをつなぐルート」こそ、滑るべき真の北壁ルートだ、と。

マルコのことを父親の気分で親身にとらえていたブライス自身は、もうやつたではないか、これ以上の挑戦はいいではないか、と説得したようだ。しかし、おそらく「あの滑降は不完全」という外部の批評もあったのだろう。マルコの心はおさまらなかつた。結局、チョー・オユー登山と一緒にいけないブライスのかわりに、彼の隊のシェルパであるブルバ・タシを隊長とし、この8月、マルコは再びチョモランマに入った。

9月4日、マルコと三人のシェルパはABCを出発、8日午後2時、昨年に次いで二度目の登頂を果たした。雪が深く、昨年より時間がかかった。午後3時、マルコは「うまく行くと思う。明日会おう」とシェルパに言い残して北壁に向かって滑降を開始、そのまま行方を絶った。シェルパたちは懸命に搜索したが、8600m地点でシュブールを確認できただけだった。ピアスをつけた、あの強いマルコは永遠にチョモランマに抱かれたのである。

1960年代に登場したスノーボード。広い板のエッジは斜面にしっかりと利き、ゲレンデを越えた急峻な雪面ではスキー以上に素晴らしい機能を発揮するようだが、チョモランマの北壁をどう滑降するのがベスト

か、そういう挑戦のレベルにまでいつていることに、愕然とさせられる。10月下旬、ギャチュンカン（7922m）から遭難と生還のすさまじい登攀のドラマが伝えられた。スロベニア・ルートに挑戦していた山野井泰史・妙子夫妻である。

6日登攀開始、7000、7500mで連続ビバークの後、8日泰史が単独で登頂、7600m地点で待つ妙子に合流して三晩目のビバーク。翌日雪の中を下降するが、妙子が雪崩で飛ばされ、50mのザイルいっばいで止まった。その際手袋をなくし、左目が見えなくなる事態に。さらにハングの岩にこすれてザイルが切れそうになり、妙子はザイルを外してバイルとアックスで自分を確保。泰史も新たな雪崩で目を傷つけて一時視力がなくなり、ハーケンを打つため、手袋を外して手探りでリスを探す、という状況となった。

結局登頂後、五晩のビバークを重ねて下降を続け、13日ベースにたどり着いた。詳細は、別の機会とするが、クライマー夫妻によるこれほどの登攀と脱出劇は、ヒマラヤ登山史の中でも、前例がないであろう。二人ともかなりの凍傷を負ったが、元気という。なんと二人か、言葉がない。

報告

REPORT
11月

図書・資料委員会

講演会

「ラスキンとアルプス」

9月20日、当会の会議室は40名を超す会員の熱気に包まれた。なかには遠路、富山市からかけつけたという会員の姿もあった。

講師・宮下啓三氏（慶応大学名誉教授、本会理事）は、画家や美術評論家として高名なうえに、わが国の山岳絵画に影響大だったラスキンの業績を平明かつ具体的に解き明かした。

宮下氏によれば、彼は一九世紀のアルピニズム黄金時代、英国人たちに大きな影響を及ぼしただけでなく、わが国の近代登山黎明期にあり、日本山岳会誕生をも促す影の力にもなったという。つまり、ウェストンと小島鳥水らを結びつ

日本山岳会の各委員会
同好会の活動報告です。

けた内容でもあり、親近感をもつて聞くことができた。

筆者など、鳥水が紹介する「アルピニストの手記」の一文をふと思いだす。「ウェストンを初めて知ったのは、同じ山手の居住者という関係で、岡野（鳥水の友人だった岡野金次郎）だった。その後岡野と私の二人がウェストンの自宅で、山手219番館を訪ねたとき、ウェストンが私たちに話して聞かせたのはラスキン先生の『近代画家論』第4巻（山の栄光）という名文の一節であった。私はわからないまでも、ラスキン先生に頭を下げる気になった。鳥水がまだラスキンの業績を何も知らなかったころのエピソードである。

宮下氏はまた、名文家の誉れ高かったラスキンの文章のなからアルプスの山々にちなむものを紹

介、筆者は再記する価値を感じる。「山はすべての景観の始まりであり、終わりである」。これは英国の名句辞典にも必ず出てくる有名な言葉だという。

「山々は美の完成を私たちに示すために創造された」。ラスキンは「山は人類のために創られた学堂であり、寺院でもある」とも書いているという。

「この世が与えることのできる最上の楽園の像は、偉大なアルプの斜面の草原と果樹園と穀物畑を織りなすスロープにある。そこには、紫色の岩石と、その上には永遠の雪がある」。おもしろいことには、ラスキンは「アルプスの山々」の単数形として「アルプ」という語を使っているという。

知らなかったことを知る喜び、知的好奇心を満たしてくれる有意義な講演だった。（田畑 真一）

自然保護委員会後援

フォーラムIN安曇野・

小谷(2)

8月24日

A常念岳登山

ビレッジ安曇野を出て常念岳を

目指すと、そこは田淵行男が通ったナチュラリストの小径。緩やかに登る前半の山道では、そこかしこの山の植物や、水の流れに気を奪われて疲れを感じる間もなく、後半はまた一気の登りで息つく間もなく、あつという間に2500mの山小屋に到着。

翌朝、前穂から槍に至る氷河地帯の大パノラマに歓声をあげる。この道を登ってみると、穂高神社の奥宮が明神にあるありがたさがわかる気がする。（大船 武彦）

B雨師山登山

小谷側の登り口は雨師高原キャ



ATLAS TREK

個人手配旅行から人気のトレックツアーやエクスペディションのアレンジまで。充実度が違う「旅」のプランニングをここがけています。山旅などあらゆるジャンルを取り扱っています。お気軽にご連絡ください。

株式会社 アトラストレック
(国土交通大臣登録旅行業1167号)

東京/〒160-0008 東京都新宿区三栄町23 TEL 03-3341-0030
大阪/〒540-0012 大阪市中央区谷町3-4-5 中央谷町ビル501号 TEL 06-6946-9111
名古屋/〒464-0807 名古屋区千代田山通り5-113 オークラビル6F TEL 052-788-2422

ンブ場からで、途中、荒菅沢下部を渡り、左岸尾根に取付き、笹平で稜線に達し、ゆるやかな草原のなかを頂上に至る。

幸い天気恵まれ、快適に往復できたが、午後になって稜線上にガスがかかってきたため糸魚川・日本海方面の景色が短時間しか望みできなかったことが残念だった。

雨飾山という「日本百名山」深田久弥の名が連想されるが、彼にとつてどういう山だったのだろうか。そのことは小谷温泉での講演「深田久弥と雨飾山」(高辻謙輔氏)およびバスの中で見せてもらったビデオ「深田夫妻・秋の乙見山峠越え」でよくわかったような気がした。

(大森 喜夫)

C塩の道を歩く

バスでまず白馬村の観音原へ。高遠石工の西国、坂東、秩父の百体観音が並ぶ。次は前山百体観音。ここから塩の道歩きが始まった。

白馬三山は雲にかくれ姿を見せない。林の中をしばらく歩くと沓掛の牛方宿。庚申塔から親坂を下る。途中に水飲み場の弘法清水があり、牛用の舟石まである。千国番所跡を見学してから昼食。

午後は千国諏訪神社に参り、右

下に学校のある狭い道をしばらく歩くと広い稲田に出る。講師の田中欣一氏の話が面白い。杉林と雑木林の間のうす暗い道をぬけると石造物の多いところに出た。線彫りの鍾馗様もある。道幅の広い三夜坂を下り、14時半頃小谷村役場に着いた。

(鶴田 佐知子)

D桐池ハイク

木道に花かざしけり鳥兜

木道の草に紛れず濃竜胆

蔓竜胆花を連ねて崖に垂れ

綿菅のちぎれし綿毛風なびき

照りかけり秋雲地塘に写りけり

*

邯鄲や深田氏偲ぶ小谷宿

邯鄲の鳴きつぐ信玄隠しの湯

(瀧沢 ちよ子)

8月25日

「フォーラムin小谷」

小谷は民謡の宝庫。役場隣の多目的ホールで開催された交流集会は、地元の民謡保存会の人々の熱演から始まった。馬方節、酒作りや機織りの唄など、労働の中から

生まれた歌の数々が披露された。『昭和子ども歳時記』の著者中田幸平氏による自著挿絵のスライドは参加者の童心を呼びました。

宮沢美渚子さんのヒマラヤの話。来日中のペンパ・ラマ氏も登場して国際山岳年にふさわしい一幕となった。

今回は地元の要望で邦楽を中心に構成した。箏・三弦・尺八・鼓による古曲から現代曲、朗読と組合せた「花さき山」など、邦楽の可能性を追及したもの。毎年、多くの方にご支援をいただき感謝している。

(近藤 緑)

山の自然学研究会

上高地インタープリター

上高地インプリ活動を始めて9年目。「上高地の夕べ」ミニトークも7年目を迎えた。時の経つのが早いことに驚かされる。今年も「すばらしい上高地で、感動と新しい体験を楽しく、なるべく多くの人々に！」をモットーに充実した活動を展開。

JAC会員を中心とした山の自然学研究会(やま学研)の主催行事として8月3日から18日の16日

間実施した。総勢20人(うちJAC会員15名)。

宿泊は、延べ宿泊数83泊(うち、山研11、上高地活動ステーション72泊)であった。山研、ステーション利用については個人の選択に任せた。将来的には、山研利用増加の方向を探りたいと願っている。

自然解説で、案内した人数は59名。実施回数12回で平均案内人数は、約5人。この数は解説員一人にちようど良い人数。期間中に動員された解説員は36人で、余力があり、この3倍の人数はこなせたことになる。なんととしても水平

(拠点)拡大を図りたいところだ。

「夕べのミニトーク」は昨年に引き続き、温泉ホテル、アルペンホテル、西糸屋山荘の3拠点で実施。聴衆合計は、835名で十分な活動ができたと思う。改善点としては、温泉ホテルが7年目の浮気か、多少飽きがきているという観点で見直しが必要。アルペンホテルでの動員数に波が大きいのでいかに改善するかにある。

「夕べのミニトーク」については、各ホテルから、今後も継続しての実施を強く希望されており、それぞれのPR印刷物、ホームページ

にも掲載するとの積極のご意見をいただいている。

日本山岳会に属する私どもにとり、上高地は縁の深い場所。今後とも継続して貢献しなければならぬという思いやしきり。そして、このインプリ作業は、関連する周囲(上高地に來られるビジター、受け手のホテル、環境省、ビジターセンター、パークボランティア(PV)ならびにJAC内部)にとつても、それが調和をもつて行われる時、意義があり有効であると考ええる。

その基盤造りに、本年は上高地に連続24日滞在。山の自然学クラブ、やま学研、PV間の調整役を勤めさせていただいた。各位に感謝すると同時に今後への期待が膨らむ。

今後の方向として、できるだけ日本山岳会の総力を結集した形で展開が図れればと考えている。皆さまのお知恵とアドバイスを期待すること大なるものあり。

インプリ活動に先立ち、やま学研の機関誌「やまの自然」創刊号「上高地インタープリタートミニトーク集」を7月に刊行した。

(古田 寛昭)

NPO山の自然学クラブ

誕生から1年

自然保護委員会とやま学研で実施していた「山の自然学講座」。この講座の実施母体とするべく「NPO法人山の自然学クラブ」を誕生させてから、この12月で1年になります。

現在この会は、JACの団体委員の立場で、まだ会員数約300名の小所帯ではありますが、1993年に発祥した生い立ちを大切に「山に学んで自然を守る」ことを目的に、各種のプロジェクトを立ち上げようとしています。たとえば「山の自然学指導員養成講座」を本年8・10月に行い、20人の山の自然学指導員を生み出しました。

山の自然学講座は毎月第3土曜を定例に行っています。室内の講座は青山のエボ会議室で、また現地へ行くときもこの日を挟んで計画しています。

関心のある方は事務局(TEL 045・833・5738 FAX 045・833・8505)までお問い合わせください。

(大森 弘一郎)

さんけん通信

またお逢いしましょう

管理人 木村 太郎・弥生

上高地の木々に囲まれ、猿を始めとする動物たちを隣人として暮らしていると時々思うことがあるのです。動植物もそれぞれに個性的で、懸命に生きているのだなあ。

山研の雨どいに暮らす蛇のへび太とへび子。へび太はふてぶてしいというか堂々としているのに対して、へび子はとても臆病者で、シャイ。へび子をじっと見つめているとその視線を感じてすぐに雨どいの中に隠れてしまいます。猿も色んなヤツがいて、玄関前に陣取っているの

で仕方なく両手を広げて追い払うと、さっと山研の塀に身を隠しながらも懸垂するような格好でこちらを何度も覗いているヤツ、こちらのことなどお構い無しにマイペースで木の実を食べているヤツ、テラスのテーブルに寝そべって木々を見ているのか遠い目をしているヤツ、好奇心一杯の目でガラス越しに山研内を覗き込んでいるヤツ。

先日岳沢ヒュッテ近くで見かけたカモシカは、人間が餌をちょくちょくやっているからかこちらにドンドンにじり寄って来て、カメラを向けるとカメラ目線でポーズを取り、もう一組の観光客がカメラを向けると今度はそちらに視線を移すツワモノ。最近人と動物の距離が近づきすぎているという感は大いにありますが、同じ土地に暮らし、近い距離で彼らに接してみると彼

らの声が漫画の「ふきだし」のように見えることがあります。と笑ってしまいます。

山研周辺の木々もさまざまな個性に溢れています。木々同士が囁いているように聞こえる時があったり、疲れた私たちを励ましてくれる木があったり、そうかと思うと全く知らんぷりで無視する木があったり。

そんな発見に満ちた上高地での今年の暮らしも終わろうとしています。私たちは11月中旬には山研を閉所し、下山しますが、今年は年末年始に山研委員が詰めて5日間ほど山研を開放する予定です。真冬の山研で、普段味わうことができない景色、雰囲気、山研周辺の木々、空などに触れてみてはいかがでしょうか。皆さんの発見を来春教えていただきたいな、と思います。また山研でお逢いしましょう。

JAC 支部だより



全国各地の支部から、独自の活動状況をレポートします。

岐阜支部

中国雲南の山々を歩く

岐阜支部恒例の海外山行は、6月15日から11日間、中国雲南省から始まる西南シルクロードの一端にふれ、4000以上の峰の登山も楽しんできた。

一行21名はまず上海に集合。中国南部最大の都市、昆明を経由して横断山脈南部の名峰「梅里雪山」や「玉龍雪山」を高所順応をかねて散策。さらに、麓のペー自治州の州都、大理(シャングリラ)や南宋時代に街が造られたナシ族の街、麗江などを探訪した。

これらの街は西安から続く中国最南、揚子江流域のもうひとつの

西南シルクロードの要衝で、この先メコン川を経てミャンマーからインド、ローマへと続くが、中国多民族文化の一端に触れることができ、印象に残った。

8日目の22日には今回のもうひとつの目的である蒼山(ツァンシヤン)への登山を行った。この山は別称、点蒼山ともいい、横断山脈南端の主峰である。海拔3500以上の19座がそびえ、最高峰は4122の馬龍峰で、18の溪流が独特の景観を作り出している。また、雨も多く、3500以上には多くの高山植物を見ることができ。

5時半に大理の宿を2台のマイクروبাসで出発。悪路ながら、登山口のある標高3200まで車で上がることができるのありがたい。

しかし、予期しない車のトラブルで予定の時間を大幅に遅れる。心配したが、梅里雪山や玉龍雪山で4500の高所順応をしたおかげで、高所による障害もほとんどなく、天候にも恵まれて21名中17名が蒼山のもうひとつの主峰、応楽峰(4029)山頂での感激を味わった。



応楽峰(4029m)に17名で登頂

また、山中にはシャクナゲやエーデルワイス、アマナ、ユリなどの仲間の花が多く、木々の植生の変化も楽しむことができた。

なお、来年の6月末頃には、いよいよシルクロードの核心部、ウズベキスタンのタシケントやサマルカンドに入り、キルギスのレーニン峰をのぞむパミールの5000以上の峰にもアタックすべく計画中です。隊に若干の余裕がありますので、ご希望の方は岐阜支部までご連絡ください。(藤井 法道)

秋田支部

姉妹山締結10周年記念 韓国山岳会慶南支部 歓迎交流登山

出迎え組の9名は、秋田空港国際線ビルの屋上で皆、空を見上げて待っていた。正午を過ぎた頃、大韓航空機がその機影を現し、静かに滑走路に滑り込んだ。8月22日(木)、申在鎬支部長をはじめ韓国山岳会慶南支部11名のメンバーが9年振りに来秋したのである。

ちなみに韓国岳人との交流は、1968年以来今日まで脈々と継続しているだけでなく、去る1991年秋には関係者各位のご尽力と奇しき縁によって、秋田県大平山と韓国慶尚南道の名峰智異山とが姉妹山になった。

本年は調印から11年目を迎え、これを受けた智異山記念登山よりちょうど10年目にあたる。そして1993年6月には、慶南支部一行が初来秋し、大平山と秋田駒ヶ岳に登り、友好を深めたのであった。

一行はマイクروبাসで空港を出発する。天鷲村や名利蛸満寺を案内してから、元滝や奈曾の白滝を



大平山頂に日韓の岳友が集う

見て、鳥海山麓の鶴泉荘に着いたのは夕方のこと。6時半から夕食会に入り、明日の天候の良きことを願って乾杯をした。

23日(金)第2日目、朝方、鳥海山の勇姿が全貌を現している。一同、胸を躍らせる。7時過ぎ、一行21名、鉾立登山口より登り始める。にわかには天気が崩れ始め、御浜小屋に着いたころには山頂も鳥海山もガスに覆われてしまつて視界がない。かと思ふと突然ガスが切れ、日本海上の飛鳥や、遠く大平山のシルエット、男鹿半島までを確認

することができた。

11時半前、大物忌神社にて全メンバー隊列を整えて新山山頂をめざす。正午前登頂を果たしたが、ガスがかかつて視界は得られなかった。山頂より少し下った岩場で昼食をとる。ここで申支部長が帽子を岩の割れ目に落としてしまった。一旦はあきらめたが、佐々木支部長が苦心とねばりの末、その帽子を釣り上げて、満場の拍手が起こつたのは今回の友好登山の幕開けを楽しく飾ったハプニングであつた。

鉾立口へピストン下山する5名以外の本隊は予定通り、七高山を経て矢島口コースを下り、鳥海山縦走を無事果たした。帰路、法体の滝を見て花立のユースプラトリーに宿泊する。

24日(土)第3日目、雨。一行は宿を発ち、午前10時には秋田市八橋の青少年交流センターにチェックインする。10時、マイクロバスで男鹿観光に向かう。

25日(日)第4日目、幸いにも天気予報が外れてくれて、好天に恵まれた。天気が見方してくれるほど、友好登山にとって心強くありがたいことはない。

一行31名は8時過ぎ旭又口より登山開始。9年前の友好登山で大平山に登った岳友が、今回のメンバーの中に2名いる。崔在一氏と

金鎮尚氏である。途中より新しく整備された宝蔵岳コースに入り、弟子還の鎖場をよじ登り、景色を楽しみながら、奥岳頂上に全員登頂したのは11時20分。記念撮影をしてから山上の昼食会となる。食後、記念品の贈呈式をしてから下山し始めたのは12時半。御手洗の泉では各自、憩いのひとときを持つ。澄んだ冷水が日韓の岳人を讃えてくれているような気がした。14時半旭又口に下る。

仁別のザ・ブーンで汗を流し、身も心もリフレッシュしてから18時半より市内の大昌園にて交流会が始まる。始めに佐々木支部長、続いて申支部長より挨拶があり、長岩顧問が乾杯の音頭をとった。日韓合わせて43名が集い、今回の友好登山の成功をスピーチや酒肴や歌で慶祝した。

本年は折しも「日韓国民交流年」であり、加えて「国際山岳年」であることが、今回の交流にさらなる無形の花を添えてくれたといえよう。宴は大いに盛り上がり、22

時前に安藤顧問の音頭で中締めとなった。

26日(月)は、午前中より秋田市の主だった名所や施設を見学し、昼食を摂って午後6時を惜しむようにして、市内観光や視察などに費やされた。

翌27日(火)9時50分、岳友一行を乗せた大韓航空機は大平山連峰の美しい全容を背にして、秋田空港の滑走路から韓国へ向けて、軽やかに飛び去っていった。機影が小さくなるまで見送り組の10名が屋上デッキから手を振っていた。

(土肥 貞之)

自分の想いを、
「本」にしませんか。

自費出版

——山岳書をつくるプロが、発刊のお手伝いをします——

山行記録集のほか、紀行・随筆・歌集・句集・詩集・写真集・記念誌などを、お望みの形や様式でつくることができます。まずは、お気軽にご相談ください。

——詳しい資料をお送りします。お問い合わせ・お申し込みは——

Tel.075-604-3120 Fax.075-604-3123
E-mail takeuchi@fd3.co.jp

編集プロダクション
TAKEUCHI 制作室
GRAPHIC ARTS & EDITORIAL

〒612-8427 京都府伏見区竹田岡崎本町55番地 F.D.サン

東西南北

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、一点につき一〇〇〇字程度をお願いします)



イラスト・宇都木慎一

日本山岳会の未来について

松本 龍雄

『山』9月号巻頭の江本嘉伸氏の日本山岳会は現在なにをめざすのか、を読んで、登山とはなにか、少なくとも私にとって登山とは、を再考させられました。

「若者の姿が少なく、パイオニア精神とはほど遠い高齢者集団としての日本山岳会がめざす何かを深く議論すべき」とはいったい何を問いかけてくれたのだろうか。

パイオニア・スピリットを必要とする登山は6千人もの会員を擁する日本山岳会員のすべての合意に基づく登山とは言い難いし、死して死を畏れずのパイオニア・スピリットの世界はあくまで個人の

ものでしかありません。

若者がいようといまいと、未知未踏の世界があるうとなかろうと私たちを登山にかりたてる何かがあるかぎり、スポーツとしての登山はすべての世代に共通の遊びとして健在です。

しかし登山なしには、日本山岳会、いやすべての山岳会は存在の価値を失います。登山とはあくまで個人の遊びですが、日本山岳会はむしろ国内の各支部をより活用し、個人会員の交流の便宜をはかり、登山をより楽しく豊かにすること、で確実に未来の百年を築くことができるでしょう。

私は1999年9月2日谷川岳オジガ沢で墜落瀕死の重傷を、地元の群馬県の人々の支えで救出していただき、70歳を超えてしまっ

たいまも、気力体力の回復のため、ジム通いもかかさず、登攀訓練もしながら再び日本屈指の谷川岳一ノ倉沢をめざす現役をこころがけています。

シアふたりで ムスターグ・アタ登頂

南井 英弘

6年前の5600[㍎]峰から毎年ヒンズークシュ・カラコルムに通っていた。この夏はひたすら歩けば登頂可能な7千[㍎]峰とのことでムスターグ・アタに出かけた。キヤラパンの起点となるスバシで4泊、休養と2回の高度順応山行の後、ラクダに荷を托しBC(4300[㍎])入り。キャンプを伸ばすごとにBCで休養を取り、典型的な極地法でC3を設けアタク態勢を作り上げた。

BCで3日間の休養後C1(5300[㍎])、C2(6000[㍎])そしてC3(6700[㍎])でそれぞれ1泊、7月26日6時15分C3から頂上に向かった。幻の頂上に感わされながらもひたすら歩き、やがて大きな岩塊が3カ所に現れ

14時30分に仲間とハイポーター2人と共に7546[㍎]の頂上に立つことができた。

頂上付近は薄いガスが流れ、時折上空がぼつかりと青空になるが、残念ながらコングールなど遠望を楽しむことはできなかった。記念写真を撮り、腹ごしらえをして30分後に下山の途につき19時30分にC3に帰還した。13時間余の長い行動だった。指に軽い凍傷を負っていたので翌日は一気にBCまで下山し、2日間の休養後BCを撤回した。

頂上近くの高所でも立ち止って深呼吸するような苦しい思いをせずに登頂できたのは、次のようなことに重点をおいて計画的に行動したのが良かったようである。まず高度順応に十分に時間を割いた。そして登高時には口すばめ呼吸に徹し、しかもできるだけスローペースで登り続けたこと、ダブルストックのフル活用、常に水分補給に努め、上部ではシャリばて防止用にゼリー状のカロリー食などを採り入れた。

登頂時、小生は66歳10カ月、同行の池谷健会員は64歳9カ月。公募登山隊がまかり通るなかで、こ

のように旧態依然とした手作りの山行を楽しんだ。この山は5500坪から5600坪の間に大きいクレバス帯があるが、高度の登攀技術は不要である。中高年の人たちでも氷河上の登降を楽しみ、7千坪を実感するには手頃だと思ふ。ちなみに我々はハイポーター2人と同行するためにパキスタンから中国新疆ウイグル自治区入りしたが、北京経由で国内線を利用し、カシガルから車を使えばその日のうちにキヤラパンの起点スバシに着くことが出来る。

日・中友好チヨ・オユー 女子合同登山隊登頂祝賀会

長尾 悌夫

10月11日午後、快晴のラサ・ポタラ宮広場、中日友好合同女子登山隊歓迎の大きな横断幕が張られ、多数の民衆が囲む祝賀式典会場に登山隊員がBCからバスで到着すると、チベット自治区体育局長姫嘉女史の挨拶で式典は始まった。私と日本テレビ河西国際部長を合

む来賓たちが順次紹介され、隊員たちには歓迎のカタがかけられた。チベットの女性たちの創作ダンスやヤクのぬいぐるみの舞などが披露され、中国のテレビ局による取材やインタビュが行われた。

夕刻からは明珠花園酒店で祝賀の宴が開かれた。チベット自治区体育局局長助理の張江援氏の司会で、はじめにチベット自治区人民代表大会常務委員会熱地主任の挨拶、次にスポンサーの華北製薬王永維氏、橋本しをり隊長、桂桑隊長の挨拶と続き、来賓たちの紹介の後、乾杯、そして熱地主任から各隊員に登頂認定証が手渡された。乾杯の応酬が続き、日中隊員がそれぞれ自慢の歌を披露したり、チベットの民族舞踊などが演じられ、和やかな雰囲気の中で宴は進行し



ポタラ宮をバックに日中の隊員と来賓が集合

た。初めての日中女子合同登山隊が登頂という成果をあげたことをチベット自治区の女性幹部たちは大変に喜んでおり、ぜひまた女子の合同登山をと意欲的であった。熱地主任は来る北京オリンピックの正式種目に登山を入れるよう北京政府に働きかけているとのことであった。

グリンデルワルト村・安曇村 姉妹都市提携30周年 記念祝賀会開かれる

藤本 慶光

去る9月30日18時より長野県安曇村乗鞍観光センターホールで、スイス国グリンデルワルト村と長野県安曇村との姉妹都市提携30周年記念祝賀会が開催された。スイスからボーレン村長やルッケン観光局長ら一行29名が来日し、出席者総勢300人余でおおいにぎわった。

この提携は、30年前に当時日本交通公社の専務であった兼松学氏(東大山の会会員)の紹介で当時の福島清毅村長が積極的に推進して実現したもの。提携当時、グリンデルワルト村から福島氏と兼松氏にベントのピッケルが贈られたが、兼松氏はこのピッケルを東大山の会に寄贈した。東大山の会では安曇村役場に飾るのがふさわしいと考え、祝賀会当日、兼松氏から安曇村の有馬村長に預けられた。安曇村役場では、福島氏に贈られたピッケルとともに両村の提携を記念して飾ることを計画している。

ヒマラヤ 越えフライト (第11・12回)

ネパール・ヒマラヤ トレッキング10日間

①12/20発 ②12/27発

①成田発着 ②名古屋発着／成都経由カトマンズへ。

●機窓からの大パノラマをお楽しみください。

アルパイン・ツアー・サービス 株式会社

国土交通大臣登録旅行業第490号／(株)日本旅行業協会正会員 日本コンドール協会会員

〒105-0003 東京都港区西新橋1-12-1 西新橋1森ビル2F ☎03-3503-1911
大阪 ☎06-6444-3033 名古屋 ☎052-581-3211 福岡 ☎092-715-1557

図書紹介



イラスト 蜂谷益雄

日本勤労者山岳連盟・編

『どうする山のトイレ・ゴミ』

信濃毎日新聞社・編

『北アルプストイレ事情』

この夏、相次いで山のトイレの本が出版された。山の環境を考えるうえで、し尿の問題が待ったなしの状態であることの現れである。

『どうする山のトイレ・ゴミ』は、早池峰山頂トイレのし尿かつぎおろし活動の報告や携帯トイレの詳しい紹介など、登山者の側からの試みをはじめとして、環境配慮型トイレ（エコトイレ）の研究・実用化や海外の山のトイレ事情までさまざまな可能性を論じている。エコトイレの電源確保の項では、

当会のミニ水力発電（上高地・山研）もとりあげられている。

一方、山小屋のトイレの現状と、新しい取り組みや行政との問題点を中心に取材したのが『北アルプストイレ事情』。信濃毎日新聞の連載記事に補筆されたものだが、記者は北アルプスの山小屋に何度も足を運び、山小屋が試行錯誤しながら「し尿と戦う姿」を描く。担当記者みずから携帯トイレを使い、持ち帰りに挑戦する姿は涙ぐましい。

両著には内容的に重複している部分も多いが、併せて読むことで、山のし尿問題の現状を多面的にとらえることができる。

山のし尿の問題は「臭いものには蓋」ではないが、つい見ないふりをして通り過ぎてしまう問題である。

しかし、たとえばこれまでチップを払っていなければ、チップを払う（まず1合目）。次にトイレットペーパーを「分別し」（3合目）、そのペーパーを「持ち帰る」（5合目）。そして、できれば「携帯トイレ」を使ってみよう（いよいよ頂上か？）。

正直なところ頂上までたどり着

図書紹介文の寄稿に関するお願い

図書委員会

本誌の「図書紹介」は、日本山岳会に寄贈された新着の発行情物の中から資料価値、公共性、あるいは一般会員の目にふれにくいもの等の基準にもとづいて、図書委員会を選んだものについての紹介文を主な柱としています。限られた紙面になるべく多くのものを紹介したいとの思いから、1点につき30ないし40行ほどに収めるようにつとめています。

他方、図書委員会の選を経ずに会員から自発的に新刊書の紹介文が会報編集者に直接送られることがしばしばあります。本

欄の活性化にとってこの種の寄稿が喜ばしいことは言うまでもありません。

しかし、完成された原稿が前触れなく送られるため、図書委員会が準備している紹介文と重なる事態が生じています。そのようなことを事前に回避するために、あらかじめ紹介文ご執筆の意志を図書委員会あてにお知らせくださいますようお願い申し上げます。

他の書物との公平な扱いを期するために行数の制約にもご配慮くださるよう併せてお願い申し上げます。

大石惇・編

『日本山岳会静岡支部報』

静岡山岳創刊準備号・

静岡支部通信（1〜50号）

『どうする山のトイレ・ゴミ』
2002年6月 大月書店発行
183ページ 1800円
『北アルプストイレ事情』
2002年7月 みすず書房発行
166ページ 1800円

会報『日本山岳会静岡支部通信』第50号発刊を機会に「静岡山岳創刊準備号」と併せ合本された。00年11月に行われた支部創立50周年記念式典出席のJAC大塚会長から「会報の合本を作った」と

話があり、定例会で合意された。
なお50周年記念誌『不盡』が新世紀への橋渡し役として刊行された。

JAC創立80周年にあたる年、支部記念事業「山岳文化講座」開設を機に支部会報発行の要望が高まり、「支部通信」の名で86年3月、第1号が西郷編集長のもと発行され、以来37号(95年4月)まで担当。「編集方針と紙面様式は本部の月報『山』を支部の事情に合わせたもので、情報誌としての役目を担うことであつた」と述べている。大石支部長は「役割は大きい。山に関するものならば何でも載せて、明るく楽しく気楽な会員の『談話室』にしたいと考えています」と言う。

年2回活字印刷、38号(95年10月)から50号(01年10月)までは有元編集長が担当。51号より題名が『不盡』、大島編集長と新世紀に向け新たな出発となる。来年はエヴェレストが初登頂されて50周年、合本が良き遺産として引き継がれ、生かされることを願い、今後の発展に夢を託したい。

(三沢 一三)

2002年4月 日本山岳会静岡支部発行 408ページ 2

000円 購入希望者は大石俣まで(FAX 054-282-3656)。

Peter Mierau・著

『DIE DEUTSCHE HIMALAJA-STIFTUNG ihre Geschichte und ihre Expeditionen』

1936年に設立され、1998年に解散したドイツ・ヒマラヤ基金(DHS)の歴史と遠征の記録。ドイツ山岳会(DAV)の叢書『Dokumente des Alpinismus』の第2巻として1999年に刊行された。

DHS設立の事情、1936、1939年のナチス政権下でのナングパルバットを主要標的とした遠征計画と実践、1945年以後の再開の困難、非ナチ化された新DAVとの関係、K・M・ヘルリヒコツファアが立ち上げた類似組織との対立、変貌した登山状況下の終焉を、DAVが保管する膨大な文書と、非常に興味深い写真を駆使して跡付けている。

そこに貫通しているのはDHSを一身に体現したパウル・パウアーの強烈な人格と思想である。それは必然的に本書の主題をアルピ

ニズムとヒトラー国家との絡み合いに向かわせる。著者は記録を淡々と提示するにとどめているが、歴史の暗部を照射することに従来のような躊躇はもはやない。

ここ10年ほど、ドイツの山岳界では旧独逸山岳会のナチス責任が登山史の不可避のテーマとして論じられている。

この問題に衝撃的な一石を投じたR. Amstatterの大冊『Der Alpinismus』(1996年)は、残念ながら本会の図書室にないが、同書に激しく反撥しつつも過去のナチス責任を真摯に究明したDA

Vの文化担当委員H. Zebhauserの『Alpinismus im Hinterstraß』(1998年)はDAVの年會報『BERG 98』に主要部分が掲載されているので、興味のある方は図書室で読めます。(平井 吉夫) 1994年 Bergverlag Rother 発行 248ページ

◆『きりぎりす』が会報賞に

青年部の会報『きりぎりす』(年4回発行)が雑誌『岳人』の2002年度会報賞に選ばれました。『きりぎりす』の内容については次号で紹介します。

「山の本」秋の新刊発売!!

大阪50山

大阪府山岳連盟 編 四六判 290頁 本体1,900円
大阪の岳人達が選んだ50山と番外2山を、山名の由来や豊かな歴史にふれながら、写真、地図とともに案内。

葛城の峰と修験の道

中野榮治 著 A5判 312頁 本体3,500円
友ヶ島の序品窟から大和川の亀瀬までの葛城28品の峰と経路を辿り、修験道史料を実地検証した山岳信仰の研究書。

●好評発売中

四国の山を歩く

尾野益大 著 四六判 300頁 本体1,900円
四国の山々50余座を、史跡、植物、景観など山の個性に光をあてて案内する四国初の本格的ガイド紀行。

カラコルム・ヒンズークシュ登山地図

〔付〕カラコルム・ヒンズークシュ山岳研究

A4変型判 上製装袋ケース入 385ページ B全判地図13葉

宮森常雄・雁部貞夫 共著

◎好評発売中!! 定価(本体33,000円+税)

ナカニシヤ出版

〒606-8316 京都市左京区吉田二本松町2
Tel.075-751-1211 Fax.075-751-2665
URL <http://www.nakanishiya.co.jp/>

会務報告

9月理事会

日時 9月11日(水)18時30分～20時
場所 日本山岳会会議室

出席者 大塚会長、長尾、村井、芳賀各副会長、西村、坂井、今村、高原、朴元、黒川、鈴木、河西、大野、中村、宮下、鳥居、小川各理事、古市、内田各監事、平林、宮崎、鰐坂各常任評議員
【委任】 藤本、松原、高遠各理事、宇田川常任評議員

【審議事項】

1 創立100周年記念事業準備委員会の発足について 西村

平成14年1月度理事会において決定した、創立100周年記念事業計画に基づき、その準備のための準備委員会を下記により発足させる。来年5月の総会後発足予定の事業委員会に先立って、一部、「記念登山」「募金」等準備を行う。

①メンバー

(委員長) 大塚会長、(委員) 長尾、村井、芳賀各副会長、西村、坂井、今村各常務理事、藤本、高原各理事、平林、鰐坂各常任評議員

②設置期間

平成14年9月11日より平成15年5月まで

③進め方

必要に応じ、理事会へ付議(審議)または報告する。(承認)

2 規定類管理規定別添資料ありの制定について 高原

(主旨) 当会の決め事(規定類という)につき、その運用、管理等の定めをすることにより、当会の合理的な運営を図る

(主な内容) 規定類の体系、名称、適用範囲、審議・議決機関等を定める

(実施) 平成14年9月11日

(承認)

3 「海外登山基金運営規定」(別添資料あり)の改正について 坂井

規定名および内容について一部指摘があり次期理事会に再提案することとした。(再提案)

【報告事項】

1 報告会・壮行会の開催について 西村

7月22日、東京新宿中村屋において、日印合同東カラコルム踏査・パドマナブ峰登頂報告会と日・中友好チョー・オユー女子合同登山隊壮行会の合同パーティーが、大塚会長、両隊の坂井、橋本

両隊長をはじめ80数名が出席して盛大に開催された。

2 日・中友好チョー・オユー女子合同登山隊について 西村

8月6日出発し、ネパール・ラシタン谷で高所順応を行い、ラサに入り、BC設営後、現在高所にキャンプを延ばしている。登頂予定は9月26日頃。状況はホームページに(ただし現在トラブル発生中)。支援トレッキング隊3名は、9月17日出発予定。

3 国際山岳年記念 特別講演会の実施について 西村

9月18日(水)18時30分より東京都体育館において標記講演会「チベットのアルプスへー中国最後の辺境・未踏の念青唐古拉山脈東部を探索」を、3回の踏査をした中村保氏を講師に実施する。なお、海外、高所登山、青年部、学生部指導委員会の共催とする。

4 資料等使用、名義後援等願について 西村

以下の依頼に対して許可した。
①(株)平凡社より、別冊太陽『山旅の宿』(平成14年7月30日発行)に掲載する、大木操氏撮影の上高地の写真2点。

②(株)ネクサスより紀行テレビ番組

資料の受け入れ

次の資料を寄贈いただき、資料委員会として受け入れました。

品名 絵画「世界の名峰 36峰ペン画集」
寄贈者 牧 潤一 (会員番号8880)
受入日 平成14年9月20日

資料委員会 鈴木 敬吾

「道浪漫」(毎日放送TBS系8月18日放映)で使用する、ウェストン夫妻の上高地での写真。

③ IWAHASHI ROCKIES FORUM (代表 福田耕三)より、文部科学省「子供と話そう」全国キャンペーン協賛事業「岩橋崇至 山の世界」写真展(11月20日より26日まで熊本市で開催)への名義後援。
④ 東京都山岳連盟より、第10回日本山岳耐久レース(10月13日、14日東京奥多摩にて開催)への名義後援。

⑤ 神奈川大学体育会山岳部・学士山岳会より、「ドリーム21」セブ

ンサミツ計画実行委員会(2002〜2008毎年1隊派遣)への名義後援

5 各委員会報告

①総務委員会

西村・高原

●ビールパーティーを9月4日(水)19時より当会ルームで開催。77名の参加があり大盛況だった。来年もウイークデ이에計画したい。

●10月19日(土)14時より当会において新入会員(2001年9月〜2002年8月入会者)オリエンテーションを開催する。連絡事項等は事前に連絡してもらいたい。

②財務委員会

村井副会長

●8月21日、高瀬さんより新任の横内さんへの引継ぎを行った。

●8月末までの会計報告があった。

●経理担当事務局員に決まった横内宏美さんの紹介があった。

③会報編集委員会

今村

9月号巻頭は、江本嘉伸さんの「ふたつの26歳(JACCの成立と100年後の現在を考える)」。

④自然保護委員会

河西

●財国土緑化推進機構より、今年度高尾の森支援金200万円の交付が決定した。

●「山のトイレ・マナーノート」

(7月刊行)が好評。九州の小中

校や、登山用具店での配布依頼がきている。

⑤医療委員会

大野

講演会「登山と低体温―モンブランからの生還―」(講師 北大OBで苫小牧東病院副院長船木上総氏)を平成14年11月9日(土)16時より17時まで、杏林大学基礎医学研究棟において開催予定。

⑥海外委員会

中村

●前AAJ編集長ベックウイズ氏が山岳雑誌「Alpinist」を刊行したと、回覧があった。

⑦山研運営委員会

小川

●今年度4月より7月までの月別利用状況報告があった。利用者累計304名(昨年279名)。

●山研管理人の木村さんより、上高地におけるインタープリテーションの実施報告があった。7月は6回21名、8月は4回32名。70、80歳代の参加者も多い。また、ガイドウォークの内容の紹介があった。

●今年年末より正月にかけて、また2月連休に試験的に山研オープン

ンを計画している。結果をみて今後につなげたい。

⑧指導・遭難対策委員会

黒川

「山の救急・救助法講習会」を7月27、28日、上高地西糸屋山荘および焼岳において実施した。講師2名含め8名が参加した。

⑨図書委員会・資料委員会

宮下

9月20日(金)19時より「山岳図書を語るタベラスキンとアルプス」を宮下啓三理事が講師で開催する。

6 その他

●UIAA 2002年次総会(10月1日〜6日)へ中村理事に出席依頼。

●9月7日、名誉会員を囲む会を開催した。100年史等についての意見もだされた。

●日・中友好チャーム・オウ女子合同登山隊支援トレッキング隊参加の賛田氏(総務、財務委員)に今後当会を目指す候補の山「シマカンリ」の情報入手を依頼した。

●長期改善計画策定プロジェクト意見聴取について。

7月理事会に引き続き、長期改善計画策定のための意見を募った。

●東カラコルム隊のテレビ放映が

10月18日、15分ほどテレビBS朝日で予定。 坂井

会員異動

物故

鈴木 重彦(5224)	01・4・20
日置 邦(8946)	02・5・29
中川喜久雄(815)	02・7・18
野田 三郎(3777)	02・8・29
奥野 正亥(1818)	02・9・6
左近丸彦(10098)	02・9・19
織内 信彦(1846)	02・9・26
村田 柴太(8987)	02・9・30
終身会員	
式 正英(5124)	

高橋尚子の
ウェア活用方法は、
ダイエットにも
応用できる。

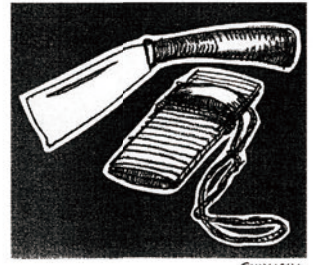


高橋尚子・高橋尚子に似せれば、
ウェアダイエットへ。
0120-888-157
受付時間 月〜金 12:00〜17:00
(土) 12:00〜15:00 (日・祝祭日)
ウェアに似せる高橋尚子
次ホームページでご覧いただけます。
<http://www.meinyu.co.jp/>
明治乳業株式会社
〒116-8308 東京都台東区新1-2-10

MEIJI 明治乳業

VAAM

INFORMATION



イラスト・宇都木慎一

◆第9回「古道を歩く」

図書委員会

武川山(1051m)に登頂、妻坂峠に下って生川右岸を横瀬まで歩きます。妻坂峠は鎌倉時代に川越・秩父間の主要交通路として栄えた峠で、戦国時代の武将畠山重忠の伝説のあるところです。

期日 12月15日(日)

集合 西武・秩父駅改札口10時

行程 秩父駅(タクシー)名栗・自然の家→武川山→妻坂峠

↓生川→西武・横瀬駅

連絡・問合せ 林栄二(FAX

042-373-0611)

*参加希望者は当日西武秩父駅に直接おいでください。

◆正月を「上高地山研」で過ごしてみませんか 山研運営委員会

施設内の冬季使用に関しての諸問題が解決しましたので、年末年

始に限り山研を試験的にオープンします。上高地の雪上散歩や徳沢まで足を伸ばして「氷壁」の舞台で遊ぶ。楽しみ方はいろいろ。

新年は朝日に輝く白銀の穂高を眺めに出かけてみては。

期間 12月30日(月)～1月3日(金)

(全期間泊可)

費用 7千円(1泊2食)

定員 1泊につき10名程度

申込み 12月7日までにハガキまたはFAXで坂本正智宛

(〒206-0031 多摩市豊ヶ丘6-2-5-1)

02 FAX 042-373-3238)

*利用希望者には案内を送ります

◆スキー懇親会のお知らせ

集会委員会

恒例のスキー懇親会を五竜遠見スキー場で開催します。

期日 03年1月12(土)～14(月)

費用 2万4千円程度を予定

宿泊 ホテルサンマルテ

集合 現地集合・解散

定員 40名

申込み

12月15日までに会員番号、住所、氏名を明記し、郵送・FAXなどで高橋聰宛(〒102-0072 千代田

図書受入報告 (2002年9月)

著者	書名	ページ・大きさ	出版元	出版年	寄贈/購入別
江本嘉伸(原作) 南一平(画)	まんが西蔵探検家 能海寛	158pp/26cm	波佐文化協会	2002	著者寄贈
江崎幸一・高橋留智重(編)	烈風マナスル'99:札幌山岳連盟マナスル登山隊の記録	80pp/28cm	札幌山岳連盟	2002	発行者寄贈
全日本山岳写真協会(編)	山稜2002:2002年全日本山岳写真展作品集(撮影地図付)	202pp/22cm	全日本山岳写真協会	2002	清水正己氏寄贈
信濃毎日新聞社(編)	北アルプストイレ事情	166pp/20cm	みすず書房	2002	三好まき子氏寄贈
澤田善太郎・澤田浅子	ぎふ百山から世界の山へ	304pp/22cm	岐阜新聞社	2002	著者寄贈
風見武秀	風見武秀 世界の山: Himalaya Alps Rocky Andes	96pp/30cm	東京新聞出版局	2002	著者寄贈
田部井淳子	山を楽しむ(岩波新書 No. 803)	230pp/18cm	岩波書店	2002	出版社寄贈

区飯田橋2・12・10 FAX 0
3・3222・0908
メール: sto@orion.ocn.ne.jp

*参加希望者には案内を送ります。

◆上高地インタープリター発表会 市ヶ谷のタベ 山の自然学研究会

今夏上高地で行った「タベのミニトーク」のいくつかを披露いたします。また、今後の展開についてご意見をいただければ幸いです。

日時 11月22日(金)18～21時

会場 日本山岳会集会所

問合せ 古田寛昭 (TEL・FAX 04

2・949・5631)

◆忘年山行「水根沢キャンプ場泊、 水根山に登る」 つくも会

宿泊の水根沢キャンプ場 (TEL 0428・86・2203) は奥多摩駅からバスで20分、水根バス停から徒歩7～8分。台所もトイレもひとつの建物になっており、大広間の真ん中には大きな囲炉裏もきつてあります。

期日 12月14(土)～15日(日)

行程 7日・14時より餅つき(雨天中止)。18時より忘年会

(豪華鍋料理の予定)。8日・水根山登山(体調により鷹の巣山を追加する)。

費用 1泊2日忘年会会費込みで1万円をお預かり残金精算

食糧 2日目の昼食は各自持参

装備 冬の奥多摩登山標準装備

定員 25名

幹事 徳永泰朗 (TEL 80・0006 武蔵野市中町2・28

・12 TEL 0422・53・3387)

*地図を持参のこと。

◆SUN燦会展

SUN燦会の2002年度絵画展を行います。油彩、水彩、版画など20数点を展示しますのでご覧ください。

日時 12月21日(土)13時30分～16時

30分

場所 日本山岳会104号室

ルーム日誌

9月

2日 総務委員会 つくも会

3日 アルパインスケッチクラブ

4日 アルパインフォトクラブ

5日 ビールパーティー 山岳地理クラブ 会報編集委員会

6日 総務委員会 フィルムビデ

才委員会

6日 集委員会 青年部 アル

7日 パインフォトクラブ

8日 名誉会員を囲む会

9日 資料委員会 山研運営委員会

アルパインスキークラブ

10日 科学委員会 二火会 アル

パインスケッチクラブ

11日 理事会 休山会 つくも会

12日 青年部 山の自然学研究会

13日 百年史委員会 秩父宮記念

14日 審査委員会 インターネッ

ト小委員会 00同期会 会

報編集委員会

18日 山研運営委員会 三水会

19日 科学委員会 集委員会

20日 図書委員会 資料委員会

休山会

21日 サン燦会

22日 財務委員会 自然保護委員

会 95同期会

25日 図書委員会 アルパインス

キークラブ

26日 青年部 学生部 96同期会

98同期会

27日 秩父宮記念審査委員会

30日 緑爽会 9月来室社者59名

■訂正 10月(689)号6ペー

ジ1段、チョー・オユー登頂の中

国側隊員は、10月1日ジジ登攀隊

長、ラージ隊員、ププツォカ隊員、2日グイサン隊長、ツアンラ隊員の誤りでした。お詫びして訂正します。

◆編集後記◆

●11月の2、3日、宮崎支部主催の「第18回宮崎ウェストン祭」に参加して来ました。前夜祭の神事で神官の祝詞の中にウォルター・ウェストン卿の名前が何度も出るなど宗教を越え、地元に着した式典の様子に驚きました。翌日のウェストン祭も地元の小中学生や関係者、それに北九州支部、熊本支部からも大勢が集まり、手作りの暖かいものでした。

●今年の冬の訪れは早く、北アルプスではすでに雪崩の事故が起きています。皆さん十分気をつけて冬山を楽しんでください。(今村)

日本山岳会報 山 690号

2002年(平成14年)11月20日発行

発行所 社団法人日本山岳会

〒102-0081

東京都千代田区四番町5-4

サンビュウハイツ四番町

TEL 東京(03)3261-4433

FAX 東京(03)3261-4441

ホームページ: http://www.jac.or.jp

Eメール: jac-info@jac.or.jp

発行者 大塚博美

編集人 今村千秋

印刷 株式会社 双陽社